

ベトナム社会科学研究所蔵・旧フランス極東学院資料 共同研究と調査の進展

和田 敦彦

はじめに

本論では、ベトナム社会科学研究所の社会科学情報研究所（Vietnam Academy of Social Sciences, Institute of Social Sciences Information、以降 ISSI）が所蔵する日本語資料群について、これまで著者を含めた調査グループが行ってきた研究・調査の経緯をまとめるとともに、今後の計画や課題について述べることにした。ベトナムでは高等教育機関である大学とは別に、研究を専門とする組織があり、その中心となっているのがベトナム社会科学研究所となる。いくつかの研究機関から構成されるが、そのうちのひとつである社会科学情報研究所は、多数の日本語、中国語文献を所蔵している。

これら文献の収集された経緯については、すでに拙稿で論じてきたが、かつてこの地にあったフランス極東学院（l'École Française d'Extrême-Orient, EFEO）の収集した文献である⁽¹⁾。フランス極東学院は、1898年に中国や近隣諸国の研究を目的としてサイゴン（現ホーチミン）におかれたインドシナ考古学研究所を前身とし、1900年にフランス極東学院と改称、翌年にハノイに移ってくる。1957年にフランス極東学院はハノイからフランス本国に撤収するが、その折に収集してきた資料類はベトナムに移管されることとなる。ベトナム社会科学研究所が受け継いでいる文献は、その中の日本語文献約1万1千冊、中国語文献が約3万3千冊である。便宜上、ここでは総称してEFEOコレクションと呼ぶこととする。

もともと私の関心は、書物の流通と読者の関係史にある。特に近代において日本語図書が国内外でどのように流通し、読者との関係を形作ってきたのかを問題としてきた。海外への書物流通では北米を研究対象としていたが、2012年以降、東南アジア地域における日本語文献の流通にも関心を向けてきた。日本の情報がどのように東南アジア地域に広がり、そこでどのような情報を生み出すこととなったのか。そしてそのことは、近代の日本の東南アジア地域への侵攻を含め、どのような政治状況と結びついてきたのか。ベトナムでの調査は、こうした関心のもとで行ってきた研究の一環でもある⁽²⁾。

私は2013年に同研究所のEFEOコレクションの調査を開始し、翌年には共同研究者の協力を得て調査グループによる本格的な調査がはじまった。さらに今年、

2014年度からは国文学研究資料館共同研究のプロジェクトとして採用され、調査が進められていくこととなった。

EFEO コレクションの調査でまず行うべきは、言うまでもなくこれら文献の目録情報の整備であり、さらにはそれら文献の保存、公開の支援である。何よりもまずどういった文献がどういう状態で所蔵されているかを把握する必要がある、かつそれらが読まれ、活用されなければ文献としての意味をなさない。その作業を土台として、さらにこれら蔵書の構成や成立、含まれている個々の文献についての検討がなされることとなろう。

以下では、まずこの調査のこれまでの経緯について述べ、次に調査の現状、その手順や方法、現時点での進捗状況について触れていきたい。最後に、本調査の今後の予定や課題、展望などをまとめておくこととする。

一 調査の経緯

前述の通り、本調査は2012年に開始した東南アジア地域の日本語文献に関する調査の一環であり、ベトナムでの調査は2013年に開始された。これまでもその折のことはいくどか書いてきており、若干重複するが、その後も含めた調査の経緯を記しておきたい。最初の調査の折、許可を得て資料を閲覧するとともに、当時の所長ホシキ (Ho Shi Qui) 氏や副所長で現所長でもあるラン氏 (Le Thi Lan) と会議をもった。その際、ISSI 側では、これら資料の存在や価値が国内外に十分知られていないことから、この資料のことを積極的に機関外に発信していきたいと考えていた。ただ、古典籍を含めた多様な日本語文献を扱う専門家が ISSI には現在居らず、その方策を検討しているところだった。とはいえ、日本語文献の目録については、すでにほとんど入力、電子化が終わっており、インターネット上での公開も予定しているとのことであった。

しかし、その後のやりとりのなかで、ISSI 側の作成した目録データには日本語による入力情報がなく、かつ、文献の正確なタイトルや作成年等の目録情報を、かなり補完していく必要があることが分かった。このため、関心のある研究者に声をかけて調査団を構成し、蔵書のより詳細な調査行うとともに、目録作成、公開を含めた蔵書整備のプランを具体的に練っていくこととなった。

こうして調査団による本格的な調査が2014年に開始された。調査に参加したのは、渡辺匡一、河内聡子、中野綾子と私のあわせて4名で、8月26日から28日の3日間、作業にあたった。事前の打ち合わせや、現地での通訳、調整にはクエン氏 (Nguyen Duong Do Quyen) の協力を得た。クエン氏は日本語日本文学の研究者でもあり、ちょうど本調査と期を同じくして ISSI で勤務することとなり、調査の

実現にあたって極めて大きな貢献している。新たに所長となったラン氏をはじめとする ISSI 側と調査団側とで二度の会議を持ち、調査の基本方針や、目録作成の方法、計画について意見交換をし、詳細をつめていった。また調査後に双方で懇親・交流の機会をもつことができた。

こうして行ってきた研究を元として、国文学研究資料館の共同研究公募に「ベトナム社会科学院所蔵旧フランス極東学院資料についての研究」として申請し、2015年から3年にわたっての共同研究として採択された。それとともに、国文学研究資料館から陳捷と海野圭介に参加してもらえることとなった。

調査グループも充実し、長期的な研究の計画、予定が明確になってきたことにもない、ISSI 側から、資料の扱いや調査データ、成果の利用に関して、調査グループとの間で正式な取りきめを公式にすることとしたい旨の連絡があった。EFEO コレクションはベトナムの重要な文化財であり、これは当然のこととも言える。このため、共同研究の参加者と、ISSI 側との間での取りきめを覚書の形で交わすことができるよう、調整することとした。

第二回目の調査は、前回調査に参加した著者、及び渡辺匡一、河内聡子、中野綾子の4名に、海野圭介が加わり、2015年の8月24日から26日の3日間にわたって行われた。そしてこの調査にあわせて、調査グループと ISSI との間で、覚書の調印式が行われることとなった。覚書には、対象資料の提供・利用について、作業データの作成と利用に関して、そして調査費用についての内容が盛り込まれた。調査団側は、年に一度の調査を現地で行い、対象資料の閲覧を許可されるとともに、調査に必要な場所や、インターネット等の作業環境の提供を受けることとなった。そして調査団側は、一年の作業ごとに、その年に作成した目録データを ISSI 側に提供していくこととなった。また、その作業データについては、ISSI 側で自由に利用、公開できることとし、調査団側でも双方の合意のもとで利用、公開を進めていくこととした。そして調査団の旅費、宿泊費については調査団側負担とし、国文学研究資料館の支援をもってそれにあてることとした。

二回の調査は、EFEO コレクションの、和装本についての目録作成にあてられている。これらについては現地での調査が必須だが、近代の洋装本については ISSI がこれまで作成した目録情報をもとに、日本の書誌データベースによって書籍を特定し、正確な書誌情報に補正することがある程度可能と思われる。このため、ISSI がこれまで作成した目録情報を提供してもらうとともに、日本国内で近代の刊行文献についての書誌データ補正作業を進めていくこととした。ISSI 側からは、その作成した目録情報以外に、書籍の最初と最後の数頁の撮影データも提供されたため、そのデータをあわせて参照しながら、作業を進めていくこととなった。

二 調査の現状

ここでは、具体的な作業の方法、目録作成の方針や、作業計画、さらには現段階での調査の進捗状況について少し詳細に述べておくこととしたい。調査は、大きく資料の整理・公開の作業と、蔵書や資料自体の分析との二つの段階に分けられる。第一の段階を終えることを共同研究の第一の目標とし、第二の段階はこの共同研究を基盤として参加した研究者達が個々に展開していくこととなる。

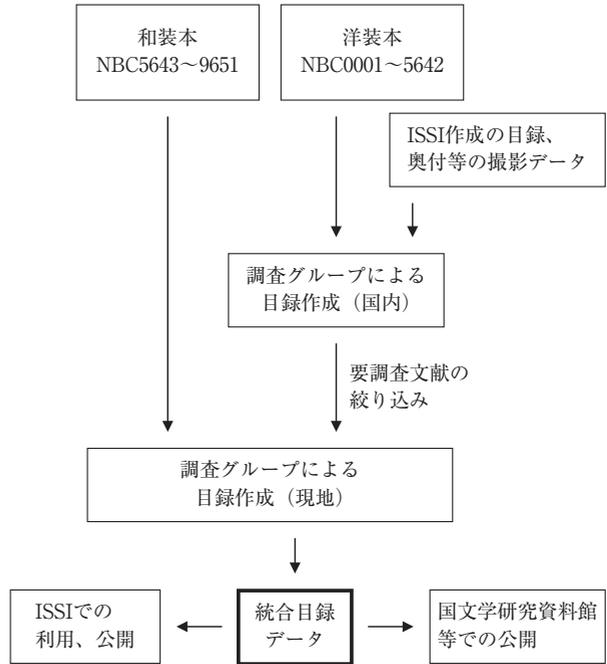
さて、資料の整理・公開は3年間での作業計画となっている。この作業はさらに資料の対象によって二つの段階に分かれている。和装本と洋装本とである。EFEOコレクションが収集してきた文献はかつての管理番号がついた旧シールと、現在の管理番号の付された二種類のシールが貼られている。このうち、旧シールはJ（和装本）とN（洋装本）とで分けられており、現在でも所蔵文献はこの二つに大きく分けて管理されている。そして、両者全体に通し番号を入れたシールが現在のシールとなる（NBCと数字）。通し番号の入った現在の管理番号では、NBC5643番から9651番までが和装本である。

和装本については現地で目録入力を行う。目録は、ISSIが全体に付している管理番号、タイトル（原綴り、平仮名、ローマ字）、著者（原綴り、平仮名、ローマ字）、刊年、刊写の区分、備考の項目をとっている他、購入や移動時に押したと思われる管理印の種別と、貴重・希少性を示すグレードについて記すこととしている。もともと、この資料全体が所蔵機関にとって貴重であることは言うまでもなく、また近代の文献を含めて、これら文献がこの地に至るまでにたどってきた来歴を考えれば、どの書物もかけがえのない存在である。ただ、ISSI側では、全体の整理とあわせて、所蔵資料の中でも特徴的な資料や特に希少な資料類についての説明や解説も可能であれば作成して欲しいという意見であった。そのため、日本国内での所蔵の有無や、所蔵機関独自の珍しい資料類等を中心に、大まかなグレードを付すこととした。また、保存や電子化、公開のプロセスを考えれば、その際の優先順位についての何らかの目安が必要となる可能性もある。

和装本の場合、基本的には一冊ごとに一つの番号が付されているため、5643番から9651番、すなわち4009冊所蔵されていると思われる。ただし、実際には番号の抜けや重複の可能性もあり得る。このうち、調査グループの初回調査では6799番までの1157冊について目録入力を終えることができた。そして2015年の第二回目の調査では、さらに第一回の調査では6800番から8925番までの2127冊についての目録入力を行い、合計でこれまで3277冊分の目録データが作成できたこととなる。したがって次年度に予定している第三回調査で、和装本の目録化作業はおそらく終了するた

め、その全体像も把握可能となるだろう。

洋装本については、番号上は1番から5642番までの部分となり、これらについては発行年やISSI側が提供してくれた撮影データをもとにして、日本国内でNDL-OPACなどのデータベースによって書籍を特定し、特定出来た書籍についてはデータ入力を行い、特定出来ない書籍にかぎって次年度以降の現地調査で目録入力を進めていくこととなる。これら作業を図示すると右図のようになる。



三 今後の課題と展望

以上のように、ISSI所蔵のこれら日本語文献についての調査は現在の所順調に進んでいる。とはいえ、前節で述べたように、この調査は資料の整理・公開の作業を行う第一の段階と、蔵書や資料自体の分析との二つの段階があり、現在作業が進み、明確な見通しのたっているのはこの第一の段階の方である。したがって、第二の段階、すなわちこのEFEOコレクションの成立や変遷、さらには含まれている資料の特徴や、個々の資料に関する分析について、あわせて研究を進めていく必要がある。

フランス極東学院の日本研究、及び日本語文献収集については、1901年にフランス極東学院の研究者となり、のちに三代目の学院長となるクロード・メートルと、その友人でもあり司書兼研究員でもあったノエル・ペリが大きな役割を果たしている。これまでもこの文献収集については論じてきたが、具体的にそこにかかわった人々の活動をより詳細に追っていく必要がある。メートルは1914年にフランス本国に戻り、ペリは1922年に没している。では大正期から戦時期の仏印ブームに至るまで、フランス極東学院の日本語蔵書の拡充や日本研究がどういう形で展開してい

たのだろうか。本年の調査で整理していた文献に、たまたま金永健の名刺がはさまっているのが見つかったが、この金永健はこの時期を知る上で重要な人物となる。

昭和十一年の四月、私が同じ学院（EFEO）の院長であったゾルヂュ・セエデス氏に呼ばれて、司書補としてそこに赴き、日本図書館を受け持つようになったとき、総秘書兼司書であつたポラル・ミュキス氏から故ノエル・ペリ氏の研究を続けてくれるように言われ、翌年の九月には、沱瀆や会安へも出張を命ぜられた。⁽⁴⁾

こう自身でも述べる通り、金永健は二人の後を受け継いで日本の仏印進駐期まで同機関で日本研究にあたっている。金は日越交流史についての研究を日本でも発表しているが、こうしたEFEOコレクションにかかわった人物達のつながり、広がりをより詳細に追っていくことが可能だろう。⁽⁵⁾

こうした観点から、本調査の期間中にも、これまでにEFEOコレクションの管理に関わった人々で、蔵書の移動や変化などの歴史に詳しい人物から聞き取りを行う計画を立ててきた。昨年からISSIを通してその調整を進め、本年の調査では聞き取り調査の機会を設けることができた。

こうした蔵書の変遷、形成についての調査・研究の一方で、所蔵されているそれぞれの文献についてのより詳細な評価、分析が必要になる。蔵書の全体的な傾向や

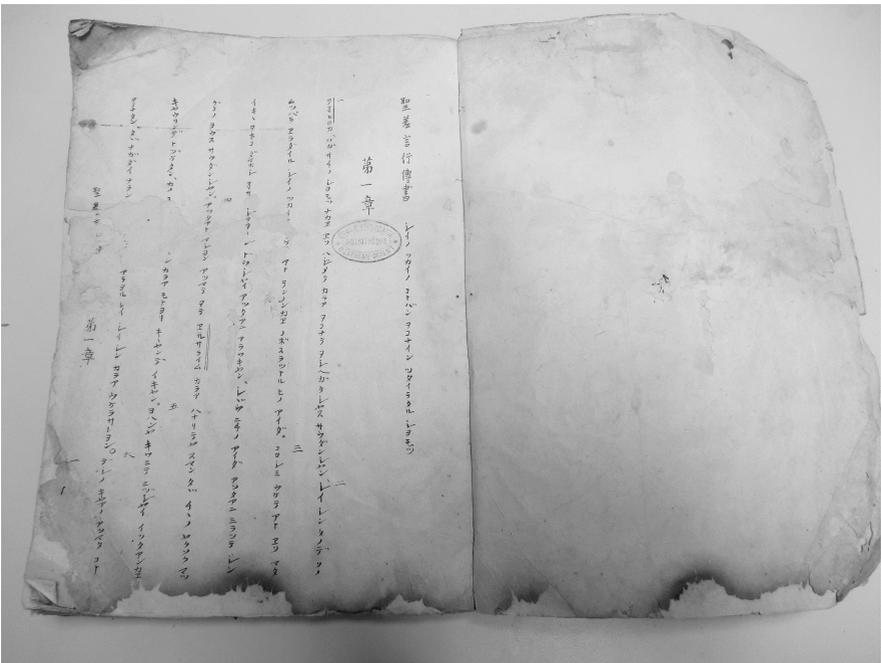


図 1

特徴については、目録化がもう少し進んでから行う必要があるが、個々の文献については貴重な文献も少なくない。本年の調査で見つかったそうした貴重資料として、ここでは『聖差言行伝』写本についてふれておきたい(図1)。

『聖差言行伝』はバーナード・J・ベッテルハイムによる聖書「使徒行伝」の琉球語訳である。ベッテルハイムは幕末に宣教師として琉球を訪れ、そこで聖書の翻訳に着手、その原稿をもとに「ルカ伝」「ヨハネ伝」「使徒行伝」「ロマ書」の琉球語版が香港で1855年に出版されている。この版本自体も珍しく、日本国内での所蔵は天理大学と聖書図書館に二冊あるのみであり、天理大学の本をもとにした複製版が刊行されている⁽⁷⁾。これ以外に、琉球大学が、この版本をもとにした鉛筆版の写本を所蔵している⁽⁸⁾。それ以外のこの本の写本の所蔵機関は確認することができない。明治期に収集された文献中にあることから、幕末から明治期にかけて作成された写本と思われるが、このEFEOコレクションの写本は、香港で出版された版とは表現上かなり異なる部分が見られる。ベッテルハイムの研究者である照屋善彦によれば、ベッテルハイムは琉球語訳の作成から刊行にいたるまでに、いくども改訂して写本を作成していたという。それら写本は現存しないが、そうした改訂過程の中でできた一書の可能性がある。香港で出版された版との、より詳細な比較検討が今後必要となろう。

EFEOコレクションで、明治期に収集された文献中にこの写本が含まれている理由は明確ではないが、前述のノエル・ペリが関心を向け、収集した可能性が指摘できよう。ペリもまた1889年来日したのは伝道師としてである。ペリはまた長野県松本での布教時には聖書の翻訳にあたり、「『新約』の翻訳を完うすべく『使徒行伝』にまで手を着けた」ということから、聖書翻訳に対する関心は深かったと思われる⁽⁹⁾。まだこれら蔵書は調査の途上にあり、ここではこの書物のみに触れるにとどめるが、こうしたそれぞれの資料についての分析や検討が今後の課題として残されている。

それとともに、これら文献の保存、公開の見通しについても、本調査の中で考えていく必要がある。具体的な保存の方法や、今後の文献の提供・閲覧の方法についても、いまだ明確に定まっていない。また、ISSI側は蔵書の電子化、公開にも強い関心をもっており、その具体的な方法についても今後話し合っていくことになろう。

(1) 和田敦彦「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院資料 東南アジア地域の日本語図書調査から」(『リテラシー史研究』7号、2014年1月)。同『読書の歴史を問う』(笠間書院、2014年7月)。

- (2) 東南アジア地域の調査については、国際交流基金による支援を得ており、「海外の日本研究と日本の図書館の役割 北米、及び東南アジアの事例から」(「日本研究支援シンポジウム 海外の日本研究に対して日本の図書館は何ができるのか」2014年1月30日、国立国会図書館)及び、「東南アジア諸国にみる日本資料 その利用と提供」2014年4月24日、国際交流基金 JFIC ライブラリー講演会)として報告してきた。
- (3) 同注(1)。
- (4) 「故ノエル・ペリ氏を憶ふ」(金永健『印度支那と日本との関係』富山房、1943年3月)。
- (5) 金については、その生涯を追いつつ東南アジア研究、ベトナム研究についての意義を論じたユン・デヨン「1930-40年代の金永健とベトナム研究」(『東南アジア研究』48巻3号、2010年12月)の論がある。
- (6) 照屋善彦『英宣教医ベッテルハイム 琉球伝道の九年間』(山口栄鉄・新川右好訳、人文書院、2004年9月)。
- (7) 天理大学出版部編『聖差言行伝』(天理大学出版部、1977年4月)。
- (8) 「展示資料紹介」(琉球大学図書館サイト、<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/library/digia/tenji/iha/h7220.html>、2015年10月10日参照)による。
- (9) 同注(4)。

(わだ・あつひこ／早稲田大学)